

人権なら

2024年9月1日

第165号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

「沖縄」を自分事として考える

中村之菊(みどり)さんが三宅町人権講座で講演

三宅町人権学習講座が8月8日、交流まちづくりセンターであった。中村之菊さんが「沖縄米軍廃棄物巡回展から一沖縄を知り、自分ごととして考える」と題し講演＝写真。40人が受講した。



中村さんは沖縄に過密する米軍基地を東京へ引き取ることを訴え、活動。米軍が関わる環境汚染問題を政府、防衛省などに要請や追及を行っている。

沖縄県の面積は日本全体の0.6%。人口は1%。その沖縄に在日米軍施設の70.27%が集中する。戦後、本土にあった米軍基地を反対運動で「追い出した」ため、米軍統治下の沖縄に持って行ったのだ。

基地問題を沖縄の人たちと議論しないままに

沖縄には日本に生息する動植物の70%の種類が存在する。絶滅危惧種95種のうちの75種は沖縄固有のものだ。そうした自然の宝庫に米軍北部訓練場があり、ジャングル戦の実弾演習が行われている。

約4000haが返還されたが、米軍は原状回復しなくともよいと日米地位協定で決めている。日本政府は支障を除去したとして所有者に引き渡したが、実際は危険物である弾薬や有害物質が次々と発見されている＝写真。



沖縄の人々は「基地の県外・国外移設」「日本国民が相応の負担を」と求めてきた。その声を私たちは「基地はどこにもいらない」と言って、消してきたのではないか。こんな大切な議論を沖縄の人たちと行わないま

ま、現在に至っている。

基地の無い島をめざした沖縄では、米軍基地の割合が日本に復帰してから急激に増えている。日米安全保障も、憲法9条も、沖縄を犠牲にすることで維持できている。安全保障や米軍基地の問題は、日本で生きるすべての人たちが考える問題だ、と語った。

米兵による性暴力事件に抗議

奈良-沖縄連帯委員会などが集会とデモ行進

「沖縄-米兵による少女・女性暴行事件—激しい怒りで厳重に抗議する！ 緊急抗議集会」が7月6日、JR奈良駅前であった。「奈良-沖縄連帯委員会」と「秘密保護法・戦争法ロックアクション奈良」が主催。100人が結集した。集会のあと、市内をデモ行進した＝写真。

昨年12月、米軍兵士が少女を誘拐し暴行するという凶悪事件が起こった。

外務省はそのことを把握しながら、この重大事件を隠蔽していた。



また、沖縄県警は5月に米海兵隊員3人を性暴力事件で逮捕・起訴したことを公表しなかったことも発覚。

基地撤去、日米地位協定の見直し求める決議

この日の行動は相次ぐ米兵による性暴力事件の発生や、外務省や沖縄県警が事件を公表せず、隠ぺいを図ったことへの激しい怒りを込めての抗議行動だった。

参加団体による怒りのアピールのあと、被害者・家族及び県民への謝罪と補償、実効性のある再発防止策の確立、容疑者の即時引き渡しと日米地位協定の見直し、琉球諸島全域のミサイル基地撤去と在沖米軍基地の撤去、辺野古新基地建設の断念を要求する決議をした。

女性が生きやすい社会を求めて

平岡良子・葛城福祉園長の呼びかけで研修会

「困難な問題を抱える女性支援法」の具現化をより確かなものにし、女性が生きやすい社会を求める研修が8月19日、県社会福祉総合センターであった。葛城福祉園の平岡良子・園長が呼びかけた。

平岡さんは「母子生活支援施設では、配偶者のない、またはそれに準ずる母子を保護し、自立を促進するため、就労、家庭生活及び児童の教育に関する相談・助言を行うなどの支援活動をしている。これまで1200件を超えるが、成功例は数%しかない。4月に同法ができて動きやすくなった。だが、6月に一時保護していた母子に起こったトラブルに対して県の対応はお粗末だった。困難女性が抱えるものは、たやすいものではない。県にも国にも交渉に行く」と述べた。

岡本あき子・衆院議員が困難女性の支援を語る

立憲民主党ジェンダー平等推進本部事務局長の岡本あき子・衆院議員が講演＝写真。岡本さんは出身地で起きた東北大震災で、避難所で朝昼晩の炊き出しをしなければならず、自宅も片付けられなかったことや、下着を干すところがあったことなど、避難所の女性たちが女性ゆえに困難を強いられたケースを取り上げた。



ジェンダーギャップ指数が示す日本の男女格差は先進主要国中、最下位。男性との収入格差が順位を下げる。2022年成立の困難女性支援法では、生活困窮、DV・性被害・家族関係の破綻、孤独・孤立の問題は、女性の福祉・人権尊重・男女平等を目的として国や地方公共団体が責任を果たす、と明記する。

女性相談や一時保護など、女性が置かれている現状を具体的な数字をもとに、若年被害女性、民間団体との協力、女性相談支援センター運営支援など、今後、注目していくべき課題を指摘した。

最後に、ひとり親支援・低所得子育て世帯などの諸

課題や男女の経済格差などの解消など、誰もが自分らしく生きることがきる社会をめざそう、と訴えた。

「さざなみの会」準備委員会の池原真智子・事務局長は一人でも多くの女性が排除されず、命を脅かされることがない社会を求め、会への結集を呼びかけた。

「沖縄戦とハンセン病」テーマに

架け橋 長島-奈良を結ぶ会が学習会

「架け橋 長島-奈良を結ぶ会」は8月3日、天理市かがやきプラザで「沖縄戦とハンセン病」をテーマに学習会を開いた。20人が参加した。



沖縄のハンセン病の歴史をみると、1930年に843人の患者が確認されている。だが、反対運動などで県内に療養所は設置されなかった。患者は九州に送られ、沖縄では患者隔離が遅れた。そのため、内務省は分散隔離の方針の下、宮古島と名護に療養所を設置した。

宮古南静園は1933年に設置された。大量の日本軍が投入され、将兵への感染予防だとして銃剣を突き付け、患者隔離を徹底した。屋我地島にある沖縄愛楽園は1941年に国立療養所となった。1944年には、患者の強制隔離収容が日本軍によってなされた。

日本軍が銃剣を突き付け、患者を隔離収容

宮古は沖縄戦で爆撃により壊滅的な被害を受けた。職員は入所者を放置、我先に逃げた。入所者は海岸の自然壕に避難するが、極度の栄養失調や赤痢・マラリアに苦しんだ。1945年だけで110人が命を落としている。

愛楽園では、入所者は壕を掘らされ、過酷な作業で後遺症を悪化させ、栄養失調やマラリアで300人以上が亡くなった。入所者は日本軍の銃剣による隔離収容や、戦火への放置という過酷な仕打ちに遭った。

こうした歴史を学んだあと、小学校教員が宮古南静園を舞台にした絵本「ツルとタケシ」を読み聞かせ。そのあと、参加者で意見・感想を述べ合った。

西畑保さんが生い立ちを語る

式下中学校の教員研修で紙芝居と講演

式下中学校は8月7日、同校で教員研修を実施。

仲川延彦・校長があいさつ。絵本作家の畑中廣之さんと、西畑保さんが講演した。畑中さんは西畑さんの子ども時代から現在までを紙芝居に再現して紹介した＝写真。



このあと、西畑さん(写真)が自らの生い立ちを語った。西畑さんは両親とも再婚で、父は和歌山県熊野川町(現新宮市)の山奥で炭焼きをしていた。山奥から小学校までは遠く、夏場しか学校に行けなかった。2年生のとき、雁皮の樹皮を売って貯めた100円(現在の2万円)を教室でなくした。お金は見つかったが、自分のだと言っても誰も信じてくれない。廊下に立たされ、「嘘つき」と言って唾を吐きかける子もいた。3日ほど休んで学校に行くと、みんなが机の上の物を隠した。1週間後には机が廊下に出されていた。それから学校に行かずに、父の炭焼きの仕事を手伝った。

妻が「辛かったです。一緒に頑張ろう」と

12歳のとき、三重県のパン屋さんで2年間働き、14歳のとき、奈良の御所市に働きにいった。そこで初めて読み書きのことで苦勞した。一番つらかったのは、電話で注文を聞くこと。たくさんあると覚えられない。優しい先輩が横でメモを取ってくれた。働き先も奈良や大阪の店を何回か変わった。店の大将が調理師免許の試験を受けさせてくれた。○×の試験だったので通った。30歳の頃、奈良市の寿司屋さんで働くことに。店の人たちは、読み書きできないことを本当に理解してくれた。



読み書きができないから結婚は無理だと思っていた。35歳のとき、見合いをした。一目ぼれ。読み書きできないことを隠しての結婚だった。あるとき、「お父さん、そこに自分の名前書いて」と言われた。字が書け

ないことがばれた。これで結婚も終わりかと思った。だが、妻が「辛かったです。これからは一緒に頑張らしましょう」と言ってくれた。子どももでき、小学校に行き出したとき、「お父ちゃんが字を書いているの見たことない」と言われた。一番こたえた。妻が「お父ちゃんは家族のために働いているの。お父ちゃんは子どものころ、苦勞して学校にいけなかったの」と話してくれた。妻のおかげで親子の仲も良く、親思いの子に育った。

65歳から春日夜間中学に通い、名前が書けた

夜9時に仕事を終えて帰るとき、いつも春日中学校夜間学級の前を通っていた。あるとき、年配の方に「ここは何をやる場所ですか」と聞いた。夜間中学で勉強するところだと教えてくれた。定年の65歳になったら、夜間中学に行こうと決めた。

夜中に入学するまでは、名前も住所も書けなかった。夜中で名前を書けたときは、本当に嬉しかった。そして、たくさんのお会いがあった。ありがたく思っている。今、88歳になる。本当に幸せです、と語った。

「いのちと価値のあいだ」とは

最首悟さんが『能力で人を分けなくなる日』を著す

最首悟さんが『能力で人を分けなくなる日—いのちと価値のあいだ』(シリーズ「あいだで考える」)を著した。「重度障害者の星子(せいこ)さんとの暮らし、やまゆり園事件の植松青年への手紙、通いつづけた水俣の地で知ったこと。『いのちに価値づけはできるか?』10代の3人と語りあう。」との表紙のことに書を手にとった。わくわく、ドキドキしながらの時間が流れる中、読み終えた。創元社。1540円。



47歳になった星子さんと暮らす中で気づき、考えてきたことを語る対話は4回。「頼り頼られるはひとつのこと」「私の弱さと能力主義」「開いた世界と閉じた世界」「いのちと価値のあいだ」をテーマに話は広がる。

非戦を唱え続けた幸徳秋水

四万十市を訪れ、秋水の墓前で反戦を誓う

親友5人が7月半ば、高知に出向き、幸徳秋水(1871～1911=写真)の墓参りをしてきた。

墓(写真)は四万十市にある正福寺の墓地にあった。墓標の側には、「幸徳秋水を顕彰する会」と市教育委員会制作の冊子2種類が置かれていて、頂戴した。

境内には、2021年11月3日に秋水生誕150年を記念して建立された「非戦の碑」(写真)があった。秋水が1904年1月17日の「平民新聞」に書いた論説の一部「吾人は飽まで戦争を非認す…」が刻まれていた。



死刑宣告日に記した「絶筆の碑」と「非戦の碑」

近くの小高い山にある為松公園にも、秋水が死刑宣告日に記した「絶筆の碑」が建つ。「区々たる成敗は且く論ずるを止めよ…」と刻まれている。大意は「こまごまとした成功失敗について、今あげつらうのはや

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

他人を誹謗中傷する文言がSNS上で飛び交っている。捏造画像が拡散されたりもしている。何らかの被害に遭って落ち込んでいる人に対するのバッシングもある。被害者はさらに苦しむ。投稿者は自らの醜い姿を隠し、匿名で蠢く。相手が弱者とみれば、汚いことばを浴びせ掛ける。そうすることで憂さを晴らし、満足感に浸る。卑劣極まりない。どうしてこうなるのか。新自由主義が社会を席卷し、緊縮財政、民営化、規制緩和、自己責任の価値観が人々の心の中に染み込んでしまったのだ。経済至上主義の社会になり、弱者は見捨てられる存在だ。この壊れた社会を立て直すには、誰もが多様性を認め、他人の生き方を尊重し、コミュニティ精神を持って地域社会を築いていくことだ。

めよう。人生への意気込みを捨てぬことこそ、古今を通じて大切なことだ。このように私は生きてきて、このように死んでいくが罪人となってあらためて無官の平民の尊さを覚えることができた」という意味だという。

大逆事件の首謀者とされ死刑に処せられた

秋水は明治天皇暗殺を企てたとされる大逆事件の首謀者とみなされ、死刑に処せられた。このとき、12人が刑死した。明治国家は自由平等思想の普及を恐れ、秋水の存在を許さなかったのだ。

戦後、多くの被告が冤罪だったことが明らかになった。市議会は2000年、秋水の名誉を回復し偉業を讃える「幸徳秋水を顕彰する決議」を採択した。



秋水は「萬朝報」「平民新聞」などで活躍。日露戦争(1904年)では非戦論を唱えた。社会主義運動に挺身。著書『廿世紀之怪物帝国主義』などを残した。

秋水の生涯と自由・平等・非戦の思想を学ぶ

秋水は獄中で「100年後、誰か私に代わって言うかも知れぬ」と書き残す。秋水が望んだ自由、平等、戦争廃絶は100年以上経った今も実現していない。秋水が闘った国家の残虐性、警察・検察・司法が作り出す冤罪も後を絶っていない。メディアも大半が権力に従順だ。



ガザ、ウクライナで起きている醜い戦争はもとより、戦争への道を突き進む日本の動きをみると、秋水が唱えた非戦のことばは重い。私たちの光明である秋水。近代史に名を刻む秋水の生涯と思想を学びたい。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/